

岐阜同朋

ぎふどうぼう

- 竹鼻鼎談 ● 教如上人御旧跡探訪記③
- コラムしょうしんげ
- 一枚の寫眞の記憶 一のすたるじっく・ふおと一

112

2014.06



御遠忌を待つ岐阜別院(上)と竹鼻別院(下)

一枚の寫眞の記憶

一のすたるじっく・ふおと一



1968(昭和43)年4月12日から18日の一週間にわたり「岐阜別院宗祖親鸞聖人七百回御遠忌」が営まれました。

その一つの催事として4月16日に「御裏方様御手植松」植樹が行われました。御裏方様(智子夫人)とは、法主(前門首)の奥様で、現在の御門首のお母さんです。

松の木は、今は無き太子堂の前(現在の岐阜教区同朋会館前)に、植えられました。

御裏方様は、優しく丁寧に松の木に土をかけられ、その後自ら水もかけられ、この松の木が大きく育つことを願われました。

今、この松の木がどこにいったのか、イヤ、どこかで生き続けているのか、

かもしれないませんが、不明です。忘れられてしまった過去の催事にならないことを願うばかりです。

編集後記

30歳になる長女が、かねてからの夢だった職業に就くことができ、この4月に東京に旅立ちました。言い出してから数年、本人も家族も半ば諦めかけていたのですが、別の仕事をしながら挑戦し続け、やっとの思いで夢が叶い、家族みんながほっと胸を撫で下ろしました。これまで何度も家族と衝突を繰り返してきた彼女が、引越しの前日に家族の一人ひとりに手紙をくれました。私には、今までの感謝とこれからの恩返しについての内容でした。

父親として娘の気持ちを十分に理解してやれず、家族の問題でつらい思いをさせたこともありましたが、何とか一人前？に育ってくれたのかなと心から嬉しく思いました。

娘は、真宗寺院に生まれ、親鸞聖人の教えにふれて成長してくれたと思います。この先の人生いろんなことがあるでしょうが、報恩感謝の生活を忘れないでほしい、どこまでも自己中心的な生き方でしが生きられない自身の罪深さと人間の悲しさを見つめながら、生きるこの意味をお念仏の教えに問うていてもらいたいと願うばかりです。

(尾畑)

竹鼻鼎談



今回は竹鼻鼎談と称して日頃から竹鼻別院にご尽力いただいているお三方、酒井忠好さん、馬場一吾さん、堀与一さん。そして、この3月で任期を終えられた竹鼻別院の高木亮道前輪番を交えてお話を伺いました。

(取材日：2014年3月26日)

司会 4月に教区の御遠忌があり、竹鼻別院でも法要が勤まります。そこで今回は、この竹鼻別院に関わりのあるみなさんに別院の現状や展望などをお話ししていただきたくと思ってお集まりいただきました。教区全体に竹鼻別院を知っていただくためにも、アピールなども含めて、ざつとばらんにお願いします。まずは高木輪番からお願します。



高木亮道輪番

高木亮道輪番(以後敬称略) 私は2008年に竹鼻別院輪番を拝命しました。不安がたくさんありましたが、引き受けたいという強い思いもありました。というのも、私の父も竹鼻別院で輪番をやらせていただいたので、先代の思いや意思を引き継ぎたいという思いがあったのです。話をいただいてから、わずか4日で作るかやらないかを決めてほ

しいと言われ、困惑しましたが、坊守、総代と相談をし、なんとか引き受けさせていただきました。あつという間の1期4年、延長2年の6年でございました。

直接前にでて、支えてくださる方、前には出ないけども熱心に聞法される方々のおかげで、この竹鼻別院は779年にわたって在り続けておるのではないでしようか。熱心な聞法者、言葉だけではなく身をもって、体でぶつかって聞法された方々あつてのこの別院だと思えます。6年という間ですが、そういう方々にお育ていただいたと感じております。

今日は私よりもずっと古くから竹鼻別院に深く関わられてきたお三方にお越しただいておりますので、是非いろいろなお話をさせていただきたいと思えます。

酒井忠好さん(以後敬称略) 私が竹鼻別院の院議員になったのは、平成2年でした。なぜ院議員をやることになったのかといいますと、私は小学校時代に当時の渡



酒井忠好さん

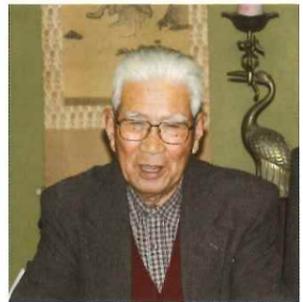
邊哲雄輪番(是性寺住職・第40代輪番)のお父さんから教えていただいたことがきっかけで、ご縁をいただきました。

また、私は11人兄弟ですが、全員小学校の時に高木輪番のお父さんにお世話になっております。深い深いつながり、ご縁によつて、私はこの別院と関わらせていただいております。私の人生を振り返ると、自分でつかんだものは何一つ無く、すべてご縁によつて与えられたものばかりでございます。

竹鼻別院の山門は本山の御影堂の棟梁と同じ伊藤平左衛門です。この山門の修復・東美濃記念会館の建設の建設委員長を任されました。山門の柱は一本の大きな自然木できております。

下部が広がっていますが、これはつないでいないのです。このあたりではなかなか見かけることができない立派な山門です。特に思い出深いのは、この柱について御遠忌の時(2007年の蓮如上人500回忌)に御門首からこの山門の柱は自然木かどうか尋ねられたことです。しっかり見てくださつておると感激しました。

馬場一吾さん(以後敬称略) 私は平成元年に定年退職をした後に、推進員となつてから岐阜教務所へ



馬場一吾さん

通つて勉強をさせていただきまして。それからいろいろなご縁によつて岐阜の門徒会の会長までさせていただきまして、参議会議員も長い間やらせていただきました。京都の本山をはじめ全国各地に行くことがあり、家族からは「じいちゃんは何やって歩いてる?」と言われていました(笑)。

竹鼻別院の現状は経済的に大変厳しいです。しかし、全国いろんな別院を見させていただいたが、竹鼻別院が一番設備が整っている



下方に広がる山門の柱は、一本の自然木できています。

と思えます。他の別院は一見立派に見えても、全然手入れがされておらんかったりして、誰が手入れをしておるんだらうかと

感じました。その点、竹鼻別院は皆さんのお力で設備も充実し、手入れもされております。本当に皆さんには感謝しております。

堀与一さん(以後敬称略) 私は自分の子どもを別院の保育園にいられたことがきっかけです。

それからフジに関わつて、もう56年も経ちます。小さい頃、別院のフジがきれいになると茶席がもうけられました。私はそれがたまたまなく好きでよく通つていました。

また、高木輪番のお父さんには大変かわいがつていただいて、仏法の話をおあてもない、こうでもないと言っていました。

「人生講座」で竹中智秀先生(専修学院元学院長)が別院にお説教で来られると、別院の庫裏が人でいっぱい、皆、無駄話一つすることなく、一生懸命話を聞いていました。亡く



堀与一さん

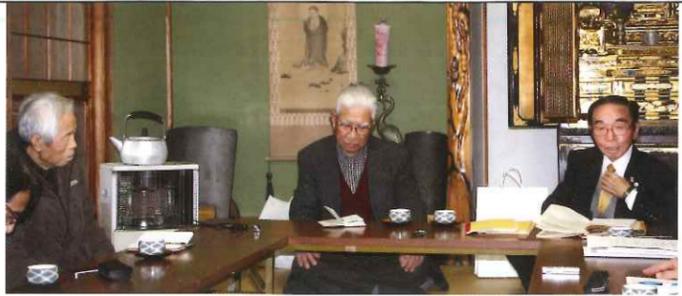
感じています。いろんな方のお話を聞くこと。そして聞くという切だと思えます。私はただ聴聞したいという思いのみでやってきました。

なられた時は本当に悲しかった。池田勇諦先生や高原覚正先生にもよく来ていただいております。すべて不思議なご縁です。

司会 今、お話にありましたように、竹鼻別院では堀さんをはじめ、多くのかたがたのおかげで、人生講座が続いています。昭和55年から今まで300回以上開かれてい

堀 高木輪番のお父さんが輪番だったころに、始まりました。始める時には名古屋の暁天講座を視察に行ったことを今でも憶えています。私は聴聞が大切だと

酒井 羽島は歴史的に、地域的に守ってくれる人がいなかった。城主がいなくて、自分たちで守らねばいけなかったのです。だから個々が助け合う精神が備わっていると思います。それは輪中地域特有の精神です。ほかでは真似できないことだと思います。「人生講座」が続いてきたのは、そういった地域性も関係しているのではないのでしょうか。



司会 岐阜別院の仏教公開講座は、お寺さんが中心となってやっているという印象があります。竹鼻の人生講座は御門徒さんが中心となって何十年と続けている。そこ

最後に今後の竹鼻別院に望むこと、展望などをお聞かせください。

酒井 いろいろお寺のことを心

配する人が多いですが、心配よりも信ずることの方が大事です。今よりもずっと苦しい時期はありました。しかし、すべて乗り越えてきたのです。賢い人がひとりいればいいということではありません。みんな考え、行動することが大切だと思っております。人間の知恵ではなく仏の智慧を大切にすること。すべては弥陀の本願だと思えます。

馬場 たとえば私個人の家のことでも貯金さえしておけばいいということではないのです。お金を残すことが大切ではないと思う。なかなか難しいが他力の信心ということが大切だと思っております。引き継いだものを守っていくのは、皆さんそれぞれの力なくしては成り立ちません。

竹鼻別院には保育園があります。そこに孫が通っております。それが、正信偈を読むことができるとなりましたし、自然と手を合わせることもできます。こういうことが大事なのでしょう。

堀 人の話をどれだけきけるかだと思います。仏縁というものをよく考えていくことが大切でしょう。

たくさん話を聞いて、いっぱいディスカッションをすること。そうすると展望がみえてくるのではないのでしょうか。

高木 お三方のななしを聞いていると力強く感じます。竹鼻別院は崇敬寺院54カ寺のお骨折り、そしてその御門徒衆のお骨折りによって成り立っています。竹鼻別院には直参門徒はありません。そこが一番苦しいところではないかと。それでも今日まで護持されている。それは、一番大切なことが伝わってきているからではないのでしょうか。

お朝事には雨が降っても自転車40分かけて来てくださる方もいます。毎朝の法話を10分から15分しておりますが、最初は法話をするんだというように思っておったのですが、実はそれは違うと気づかされました。話

をするということは話を聞くということであつたと。本当にたくさんの方に育てていただいた6年間であつたと感じます。

保育園では園児が本堂の前で毎朝手を合わせて、「ののさま、おはようございます。今日も一日がんばります」と大きな声で言っています。帰りには「ののさまさようなら。今日も一日がんばりました」と。はたして、わたしたち大人がこれができるのでしょうか。本堂にすこいこと、別院に保育園が在るといふこと、保育園に宗祖の教えが在るといふこと、それが大切だと思います。

ここを卒園した子どもたちが大きくなっても竹鼻別院との関わりを持ってくれる。そう信じ願っています。

司会 皆さんのお話を聞いてみると、竹鼻別院への篤い思いや誇りが伝わってきます。本日は貴重なお時間をいただきました。ありがとうございました。



1600(慶長5)年7月、教如上人は下野国小山(栃木県小山市)の家康の陣を訪ねた後、京都への帰途について、美濃国で石田三成勢に襲撃を受けた。羽島の西方寺、森部の光顕寺にては、近在の僧侶、門徒衆によって守られ救われた。さらに大垣の西園寺においては、西園寺住職が教如上人に似ていたことから、住職自らが上人になりすまして、関ヶ原を進み石田軍によって捕えられ命を落とした。この間、教如上人は揖斐の春日へと門徒衆に守られながら逃れたのである。

今回は、この春日の地に伝承されている「顕教踊り」、教如上人の命日の5日に行われる「五日講」、さらに教如上人が石田三成勢の追手から身を隠したといわれる春日(揖斐川町春日)と滋賀県伊吹(米原市)とを結び、国見峠近くの「鉦ヶ岩屋」を紹介いたします。

2013年10月5日、教如上人400回忌にあたるこの日、春日の長光寺にて、法要が勤まった。

春日では毎月教如上人の命日である5日に「五日講」が行なわれている。特に10月5日の時だけに開帳される寿像は、春日の僧俗門徒衆が自分達の身命を投げ捨てて教如上人を守ったことに対し、上人が後日、春日八ヶ寺の僧俗へ下賜されたものである。これを八ヶ寺共有にて奉安し、毎月当番の寺院にて五日講が営まれて



は、(寿像が安置されている間は)朝夕、必ずお寺に寄った。祖母と一緒に参りしたものだ。お寺によっては、三ヶ月も(寿像を)あずかる事もあり、今思うと大変だったと思う。



お供えの酒瓶に注目!

いる。また五日講は八ヶ寺の輪番制になっていて、各寺院一か月から四ヶ月の割で寿像の安置が定められている。以前は、輪番となった寺院は安置の間、門徒衆が毎朝夕、寿像に御仏飯をお供えしたとの事であった。

この日、参詣者の一人である80代の女性は、「私が子供の頃は、(寿像が安置さ

でもその頃はそんな事はみんな思っていなかった。教如上人を知らない人はいなかった。それが今ではお参りもせず、御無礼なことです。」と昔の様子を話して下さった。

この春日では、教如上人が人々と共にいらつしやつた。春日の人々の生活の中で、いつも教如上人を身近に感じていたのであつたと。

法要後、長光寺境内にて「顕教踊り」が行われた。

「顕教踊り」は、顕如・教如両上人が、甲津原(米原市甲津原)に逃れてきた時に、両上人を陣中で慰撫するために、村人が踊ったことが起源と伝えられる。(太田浩司氏「教如上人をたずねて」より)



甲津原は、国見峠をこえた北、滋賀と岐阜の県境近くに位置する。この春日は時をこえて滋賀より移住してきた人達があり、その人達によって「頭教踊り」も伝わったのではないかと。それによつて、この春日に長い間「頭教踊り」が伝承されてきたのだ、と説明をうけた。

紺色の着物を身につけ、太鼓の音に合わせ歌とともに輪になって踊る、静かなそとしてどこか憂いを感ずる時間の流れの中で、このように、春日の地で人々の生活に密着しながら、そして今なお心のどこかに生きながら受けつがれてきている教如上人、改めて上人の人間像に思いをめぐらされた。

頭教踊りが終わる頃、本堂では27人分のお齋が用意されていた。「27」という数は、春日にて教如上人を命がけて守った勇士の人数とされていて、予め決められている27人の門徒さんが席についた。教如上人はお酒を嗜み、粕川谷で休まれた時には、大豆の煮た物を出したところ、大変喜ばれたという事で、お齋にはお酒と煮豆が必ず添えてある。その他、地元で取れた山菜等、おいしうで、めずらしい御馳走が所狭しと並べられた。門徒さんたちが談笑しながらそれらを取り分け合う姿には、今や失われつつある人と人とのつながりの原点があるようであり、そこには教如



上人が息づいていた。

秋も深まる11月21日、教如上人が春日の里からさらに山中に身を隠したといわれる「鉈ヶ岩」へと足を運んだ。

山中の為、案内人が必要という事で依頼をし、まず向かったのは村里からほど近い山中、沢の流れる側にある大きな岩屋であった。



見つけやすいという事で、さらに険しい山中にある「鉈ヶ岩」へと身を移した。「鉈ヶ岩」とは、岩が鉈に似ているところから名付けられた大きな岩屋である。案内人のもと鉈ヶ岩への登り口まで行ったものの、あまりの急勾配の坂と、積もった落葉

に足をとられるので、思わず絶句した。まさに身を隠すには適所ではあるが、この山道を門徒衆は教如上人へ食事を運び、守ったその尽力を思うと、並々ならぬものを感じた。(鉈ヶ岩への取材は6人でアタックしたが、到達できたのは2人のみ

であった。それほどに山中の道は困難を要した。) 教如上人はこの「鉈ヶ岩」に身を隠している最中に、関ヶ原の合戦にて東軍(徳川側)の勝利を知り、それによつて岩屋を下り、その後京都へと辿りついたのである。

一時は本願寺を継職したとは

いえ、当時は隠退の身であった教如上人を支持し、身を挺してまで守った僧俗門徒達。このように人々の心をつき動かした上人、その人間像は計り知る事はできないが、東本願寺を創立し、各地に御坊(別院)を建立し、今に至っている事は、ゆるがない事実である。



しょうしんげ

貪愛・瞋憎之雲霧 常覆眞実信心天

貪愛・瞋憎の雲霧、常に眞実信心の天に覆えり。

先日、妻の友人が神妙な様子で相談があると訪ねてきました。赤ちゃんを身ごもったとのことでした。本来なら新しい命を授かり喜ばしいことなのですが、4人目の妊娠ということもあり、また様々な家庭の事情で産むかどうかを悩んでいる、どうすればいいだろうかという相談でした。私も妻も、事情は分かるけどせつかく授かった命だから産んでほしいと話をしたのですが、私たち夫婦の説得も空し

く、後日電話があり、彼らは夫婦で中絶するとの結論を出し、これから医者にそのことを告げに出かけるとのことでした。

ねばと心から思ったそうです。その失われた2人の命が、残る1人の命を支え、守っているように感じたのでしよう。その事実が、命の不思議さ、難さ、生きるということ死ということの眞実が見え隠れします。夫婦は自分たちの都合で中絶を決意した(我が身を貪愛した)のですが、いのちの眞実を突きつけられて(如来のはたらきにふれて)、自分たちの思いの浅はかさや誤り(雲霧に覆われた眼)に気付かされていった(眞実の信心をたまわった)のでした。私たち夫婦もこの話を涙なしでは聞くことができませんでした。この命を皆で全力で支えたいと思ったことでした。

けられると、私たちの眼がいに偽りに眼であつたかと思ひ知らされず。命があつて当たり前、私の命は私のもという私たちの生き方に眞実の光が差した瞬間です。そして私たちの眼が偽りの眼であるからこそ、阿弥陀如来のはたらき(本願)に出会い眞実に目覚めさせていただく御縁をたまわるとののだと親鸞聖人はおっしゃいます。ありのままの私が救われていく道、眞にご本願の逞しさ有難さを喜ばずにはおられません。



産婦人科に行くとき先生がカメラでおなかの中の様子を見せてくださった。そこには三つ子の赤ちゃんの姿が映っていたそうです。でもその中の2人の赤ちゃんの心臓はすでに止まっており、残る1人の赤ちゃんの心臓だけが元気に動いていたのです。その姿を見て友人夫婦は涙がとめどなく流れたし、この命のある1人の子を守ら

生と死という厳粛な事実を突きつ

けられると、私たちの眼がいに偽りに眼であつたかと思ひ知らされず。命があつて当たり前、私の命は私のもという私たちの生き方に眞実の光が差した瞬間です。そして私たちの眼が偽りの眼であるからこそ、阿弥陀如来のはたらき(本願)に出会い眞実に目覚めさせていただく御縁をたまわるとののだと親鸞聖人はおっしゃいます。ありのままの私が救われていく道、眞にご本願の逞しさ有難さを喜ばずにはおられません。